

藩医の仕事 —須恵の眼科 田原貞一の場合—

『公務手鑑并私用出方 二』による

上園慶子（西南学院大学大学院）

はじめに

【須恵歴史民俗資料館】

江戸時代に来日した欧州の医師たちは日本人に眼病患者が多いことに驚いている。『ポンペ日本滞在看聞記』¹⁾（雄松堂、1986）には「日本人は世界のどこよりも眼病が多い」と書かれている。多かったのは、結膜の疾患（ただれ目など）や白内障、鳥目など。原因として、眼科治療に関する知識の欠如、炭で煮炊をする生活などが指摘される。

筑前須恵に、天保年間「日本四大眼科」（小川剣三郎『稿本日本眼科学史全』²⁾ 1904）と呼ばれた田原眼科がある。今回は、田原眼科の概要と9代田原養柏貞一が著した『公務手鑑并私用出方 二』（福岡市総合図書館蔵）について報告する。

1. 須恵町における眼目療治の始まり

【墓・墓地】

『筑前國續風土記附録』³⁾「醫傳は高場順世より出たり」

高場順世は、唐津城主寺沢志摩守広高家臣、俗称進士兵衛

島原の乱後の主君改易により浪人、粕屋郡内橋で眼科医

上須恵村の田原・須恵村の高場・内橋村の中村に医術伝授

貞享3年（1686）11月5日没

『高山司慶流眼科書』⁴⁾（研医会図書館（東京）蔵）の巻頭

【写真】

「九州筑前国末邑 高田七兵衛伝授書 真田了二、高場順清、田原養伯」

高田七兵衛・真田了二は不明

2. 田原家について

【家系図】

豊後大友氏の有力な家臣、明暦年間（1655-58）国東より須恵村に移住

始祖の弥吉貞俊が、高場順世から眼病治療を習得

2代弥吉貞勝が上須恵村で眼科開業

養朴（卜）・養柏（伯）・養全を一族内で繰り返す襲名

4代養柏貞宜～12代養全貞肅 福岡藩の藩医

6代養柏貞敷～9代養伯貞一 江戸詰方

大正年間、本家筋3家は福岡市へ、分家は志免町へ移転

現在 本家（香椎）は 17 代目、分家は 6 代目で眼科開業中

3. 眼目療治の実際

①正明膏

【正明膏】

「此須惠村は正明膏あるがゆへに繁昌す」（奥村玉蘭『筑前名所図会』⁵⁾）

『高山司慶流眼科書』—寒水石など生薬 10 種の練り薬 【処方内容】

「突目、ウズキ目、疵目、鳥目、メモライ、五臓六腑の疼目 72 種、
其外 6 種共ニコノ正明膏ニテ治セズト云ウ事ナシ」

②外科手術

【イラスト図】

とくに白内障手術に長ける

手術の方法「針立て法」

角膜あるいは強膜から針を刺入、混濁した水晶体を硝子体中に落とす法

③診療記録『眼目療治帳』（須恵町立歴史民俗資料館蔵）

【表紙・内部】

文政 2 年(1819)～嘉永 2 年(1849) 30 年間で 9 冊現存

初診日・診療終了日・氏名・出身地・宿名・処方内容・治療代など

1 年間の記録完備 6 年分

【集計結果】

年間初診者数 “筑前以外” 約 1,000 名程度

“筑前国内” は完備せず初診者総数は不明

日本各地から受診

④眼療宿場

【宿場図】

眼科の治療日 30 日～200 日

田原眼科の周辺 宿屋を兼業する農家が集中

『眼目療治帳』 42 の屋号あり、38 は特定済み

4. 藩医の待遇

文化 14 年 (1817) 分限帳 (『黒田三藩分限帳』⁷⁾ 1977)

藩医総数		115 人、		
内訳	本 (本道,内科医)	56 人		
	小児 (小児科医)	16 人		
	外 (外科医)	20 人		
	針 (鍼灸医)	15 人		
	口 (歯科)	3 人		
	眼 (眼科医)	5 人		
眼科医	1、120 石	田原養全	上須恵	*
	2、3 人扶持	白水養禎	早良内野	*田原の弟子格
	3、18 石 3 人扶持	山路東英	福岡木町	
	4、10 人扶持	岡 正安	下須恵	*
	5、3 人扶持	中村正宅	粕屋内橋	*

* : 高場順世系統

御鷹医 150 石、馬医 3 人扶持

天保分限帳 (『福岡藩分限帳集成』⁸⁾ 1999・海鳥社) 眼科医 5 名

- 1、120 石 田原養卜 2、18 石 3 人扶持 山路東慶 3、10 人扶持 岡 正節
4、3 人扶持 白水養伝 5、3 人扶持 中村正宅

文久 2 年 (1862) 分限帳 (『黒田家資料』⁹⁾ 福岡市博物館蔵) 眼科医 5 名

- 1、120 石 田原養全 2、3 人扶持 白水養傳 3、18 石 3 人 山路東明
4、3 人扶持 中村正宅 5、10 人扶持 岡 正節

江戸時代後期 眼科医の構成・待遇 不変

5. 藩医の活動

【手鑑写真】

田原貞一 (1804~1849) 田原家の 9 代目養伯 (養柏)。

小川剣三郎『稿本日本眼科学史全』—「田原流・・・ソノ第九世尤も名アリ。

尤も手術ニ長スト稱セラル」

小川剣三郎編『稿本日本眼科年表』¹⁰⁾

—「嘉永 2 年(1849) 5 月 23 日 田原養柏没(44) 江戸ニ在コト 18 年」

『公務手鑑并私用出方 二』 (長博 25 歳、田原 30 歳)

【史料 1】

天保 6 年 (1835) 元旦~天保 10 年 (1839) 4 月 13 日、勤務状況 (出方・奉伺・廻務)、藩主などの健康状態、訪問先、頂戴物、申来の書状・申請書の文面、行事などを記したもの。65 丁、1 冊

1) 福岡勤務：天保 6 年 (1835) 1 月 1 日~同年 6 月 23 日

藩主 (黒田長博) 在国：天保 6 年 4 月 18 日~同年 6 月 23 日

①勤務日

式日：1 日・15 日、祝儀日、節句、臨時

②藩の一員としての出勤

年礼(1/1,1/6) 松囃子(1/15) 祝儀(1/16) 藩主下国(4/18,4/19)

節句(5/5) 藩主帰国(5/9) 藩主家督済(5/30)

③眼科医師として

藩主診察 帰城後初(4/20) 長崎発駕前(4/27) 定例(5/15)

眼気不同の訴え→洗い薬(5/23) 定例(6/1,6/15)

江戸詰前(6/23)

大奥女中治療 6/4

見立 (所見会力) 4/7 4/8 5/9 5/15

④通勤手段

須恵村-福岡城 約 17 k m 馬力 (3/7)

時に博多(1/15) 浜口町(2/15,3/3,4/27) 妙見カ(4/7)
川端町伊勢屋(4/8) 不明(5/23) 御殿(6/3) に宿泊

⑤乗馬の記事

2/23 香椎遠乗
3/18 須恵遠乗 50 騎
5/13 御馬拝見 追廻馬場カ 幕府拝領の馬カ [史料2]
5/23 乗馬御供
6/3 今津御漁
6/9 山笠御覧 箱崎遠乗

⑥秋月訪問

1/26~2/2 甲斐守、韶翁様、栄姫、御部屋様、
村民の出迎え

⑦その他

5/13 給仕役、大奥へ蛸献上

⑧拝領物

1/29 秋月にて種々
5/13 内分にて縞金巾一反、御菓子
5/23 御膳頂戴 団扇 6 本
6/3 御菓子 1 包
6/5 団扇 3 巾着 1 盃 1 御菓子 1 包
6/15 ゆかた
6/22 御酒御吸物
6/23 御帷子

⑨寄合・酒席など

2/15(大浜) 2/16(妙見) 3/3(中の島、大浜) 4/1(能見物)
4/8(能見物、川端) 5/1(須恵)

⑩江戸詰に関して

3/13 辞令 8 代と交代の為
6/14 願書提出 親族の同伴許可 船舶利用

⑪分家開設

3/1 弟 養明へ

【 次回 】

2) 江戸詰方：天保 6 年 (1835) 7 月 25 日～天保 10 年 (1839) 4 月 13 日

藩主 (長博) 江戸：天保 7 年 10 月 25 日～同 8 年 3 月 27 日

天保 9 年 10 月 25 日～同 10 年 4 月 1 日

前藩主 (斉清) 江戸：天保 6 年 (1835) 7 月 25 日

～天保 10 年 (1839) 4 月 13 日

6. まとめ

9代田原養伯は眼科史上、「天保年間 日本4大眼科」として知られ、江戸での評価は高かったと思われる。

『公務手鑑并私用出方 二』の前半、江戸詰方前、福岡での記事より。

1) 藩主との関係

- ・藩主（25歳）と年齢的に近い
- ・藩主は江戸生まれ、江戸育ちで、身近に話せる人は少ない
- ・医師は士農工商の身分制度外で、縛りが緩やか
- ・乗馬が得意
- ・性格が陽性で、人好きがした

医師・家来としてばかりでなく、友人或いは家族の一員のように、親しく用いられた

奥にも出入りし、大奥にも同様に人気があった

2) 上層部との関係

- ・秋月に招かれて歓待
- ・藩医（120石取）として藩の公的行事・節句に参加
- ・上層部からの指示が円滑に進む
- ・須恵は遠乗の目的地 勤務外の利用価値がある

信頼され、受けが良かった

3) 医師仲間との関係

- ・見立に参加、能見物などに同行、酒席も多い
- 本道（内科）など他の分野の医師とも仲が良かった。

4) 村民との関係

- ・秋月からの帰途、村中出迎え

大いに慕われた

以上より、9代田原養伯は医師としての能力も高いが、人間的にも魅力的な人物と思われる。

今後は『公務手鑑并私用出方 二』の後半、江戸詰方中の記事より、田原養伯の

- 1) 江戸での藩主との関係
- 2) 眼疾患を持つ前藩主との関係
- 3) 御前様との関係、
- 4) 江戸市中での診療
- 5) 江戸での生活ぶり

を詳細に調べ、「日本4大眼科」と呼ばれる背景に迫りたい。

附. 日本四大眼科

天保年間の日本四大眼科 筑前の田原流の他、尾張の馬嶋流、信州の竹内流、江戸の土生流

- ① 尾張海部郡 馬嶋眼科一室町初期、五大山安養寺明眼院の清眼大僧都が創始
日本最古の眼科 現存
- ② 信州諏訪 竹内眼科－江戸時代初期、武士の竹内新八郎開業 現存せず
- ③ 江戸 土生眼科－1440年頃 朝鮮の眼科学を修得 安芸国で眼科を開業
土生玄碩のとき 広島藩藩医 文化7年(1810)から江戸幕府の医師 医家
として最高の荣誉と富を得た 現存か否か不明

7. 参考文献

- 1) ポンペ『ポンペ日本滞在見聞記 日本における5年間』沼田次郎・荒瀬進共訳 雄松堂 1968年
- 2) 小川剣三郎『稿本日本眼科学史全』吐鳳堂 1904年
- 3) 『筑前国統風土記附録』(中巻)加藤一純・鷹取周成共編 文献出版 1977年
- 4) 『高山司慶流眼科書』1冊 研医会図書館(東京)所蔵
- 5) 奥村玉蘭『筑前名所図会』1841年
- 6) 『須恵町誌』須恵町誌編集委員会、1983年(第4章 須恵町の歴史 第3節 近世、989-1073頁。執筆：石瀧豊美)
- 7) 福岡地方史談話会『黒田三藩分限帳』 1977年
- 8) 福岡地方史研究会『福岡藩分限長集成』 1999年
- 9) 『文久二年分限長』黒田家資料 第2次 324、福岡市博物館所蔵
- 10) 小川剣三郎編『稿本日本眼科年表』1929年 84頁 1冊 研医会図書館(東京)所蔵



Handwritten text in vertical columns on a page from an old book. The text is written in black ink on aged, yellowish paper. The characters are in a cursive style, likely a form of Chinese or Japanese calligraphy. The text is organized into several columns, with some characters appearing to be names or titles.

Handwritten text in vertical columns on a page from an old book. The text is written in black ink on aged, yellowish paper. The characters are in a cursive style, likely a form of Chinese or Japanese calligraphy. The text is organized into several columns, with some characters appearing to be names or titles.